

2024.4.6

「日本神話」について

しみずてつろう
清水徹朗

1. 「神話」と何か

神話(Myth)とは、宇宙、人間、動植物、文化の起源・創造などの自然・社会現象を超越的存在(神)や英雄などと関連させて説く説話。神々についての物語。日本語の「神話」は「Myth」の翻訳語(1890年代から使用)

ギリシャ神話(「イリアス」「オデュッセイア」)、創世神話(「旧約聖書」)、インド神話(「マハーバーラタ」「ラーマヤナ」) 昔話・説話・伝説との違い、アニミズム、自然崇拜 科学の発展によって非合理、非科学的であるとみなされた ← 神話学(ミュラー、レヴィ・ストロース、ユング等)、比較神話学の発展



2. 「日本神話」とは何か

「日本神話」とは「日本に伝わる神話」のこと

「記紀神話」.....『古事記』『日本書紀』の神代編

.....^{せい き やまとちょうてい}8世紀に大和朝廷によって^{せいしよ か しんわ}成書化された神話

『^{ふ ど き}風土記』.....^{しよこく さんぶつ}諸国の産物・^{ちめいとう}地名等の伝承(播磨、常陸、出雲、肥前、豊後) ^{のりと}祝詞(のりと)、
^{せんみょう}宣命(せんみょう)

『^{こごしゅうい}古語拾遺』(807).....^{いみべ し いまわべ し}齋部氏(忌部氏)の伝承を^{でんしろう ちゅうしん}中心にまとめたもの 『^{せんだいきゅうじほんぎ}先代旧事本紀』
(9~10世紀初め).....^{せいきはじめ}物部氏の立場から^{ものべし}まとめられた^{たちば}史書^{ししよ}



從五位下齋部宿禰廣成撰

校正
古語拾遺全

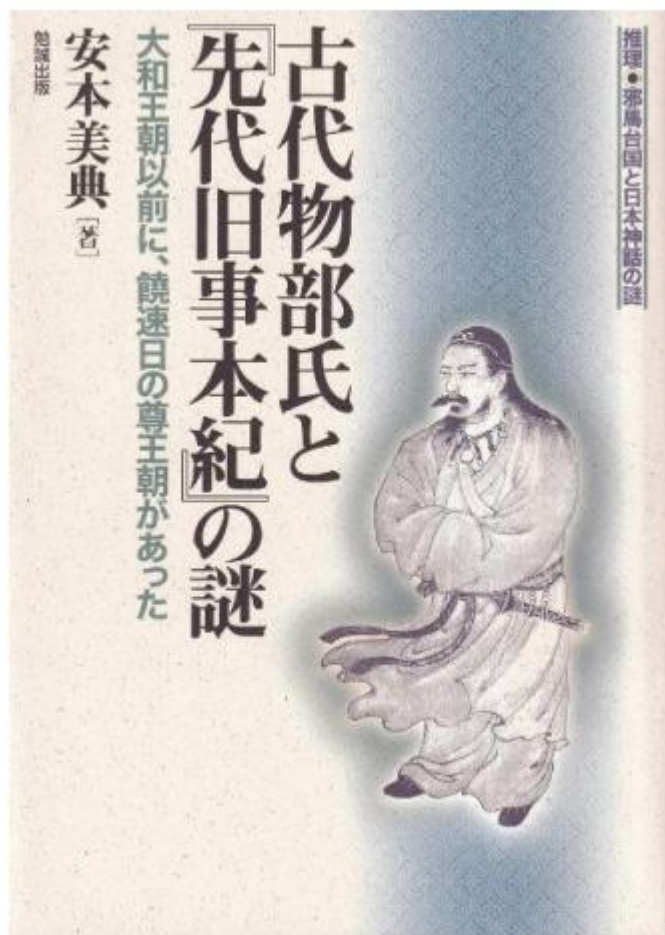
大同三年二月十三日
元祿九年校正 鴻寶堂

古語拾遺一卷加

從五位下齋部宿禰廣成撰

蓋聞上古之世未有文字貴賤老少
口口相傳前言往行存而不忘書契
以來不好談古淳華競興還嗤舊老
遂使人歷世而彌新事逐代而變改
顧問故實靡識根源國史家牒雖載

從五位下齋部宿禰廣成撰
古語拾遺一卷加
大同三年二月十三日
元祿九年校正 鴻寶堂



てんちかいびやく く に う み かみ う み あまのいわと なかつくに へいてい
天地開闢、国生み・神生み、天の岩戸、中つ国の平定、
 く に ゆ ず り てんそんこうりん うみさち やまさち いずもしんわ
国譲り 天孫降臨、海幸・山幸、出雲神話

いっばんに き きの かみよ ものがたり き きの しんわ かんがえ
 「一般には、『記・紀』の神代の物語を『記・紀』の神話といている。しかし考え てみる
 と、これを神話とよんでよいかどうか問題がある。……『記・紀』の神代 の物語は、神話を
 ざいりょう か き あらためて か き な お し てんのう そせん
 材料としながらもそれをいちじるしく書き改めている……その 書き直しは天皇の祖先の
 あまてらすおおみかみ ち い た か め てんのう にっぽんしはい せいとうか ちゅうしん もくてき
 天 照 大 神の地位を高め、天皇の日本支配を正当化 することを中心の目的にして
 な お き こうじろ う にっぽんしんわ こだいこっか
 いる。」(直木考次郎『日本神話と古代国家』(1990))

にっぽんしんわ てんのうこっか きげん とときあかし てんのう どうちけん しんせいせい りっしょう せい しんてきしちゅう
 「日本神話は天皇国家の起源を説明し、天皇の統治権の神聖性を立 証 する精 神的支柱を
 じゅうよう き の う ないざい みずのゆう にっぽんしんわ み な お す
 なすという重 要な機能を内在」(水野祐『日本神話を見直す』(1996))



3. 『古事記』の概要

げんそん にっぽんさいこ しょもつ
現存する日本最古の書物

ひえだのあれ ていき きゅうじ ないよう しょうしゅう おおのやすまる もじ かき あらわし へんしゅう
稗田阿礼が「帝紀」「旧辞」の内容を誦習したものを太安万侶が文字に書き表し、編集
して712年に元明天皇に献上。

じょうちゅうげ みつまき てんちかいびやく すいこてんのう
上中下の三巻(天地開闢から推古天皇まで)

ていき てんのう ちゅうしん こだい でんしょう てんのうめい こうひ おうじ こうぎょ ちせい りょうぼ
『帝紀』.....天皇を中心とした古代の伝承(天皇名、后妃、皇子、皇居、治世、陵墓)

きゅうじ きゅうていうちのものがたり こうぞく くに きげん
『旧辞』.....宮廷内の物語、皇族や国の起源

じょうかん にっぽんしんわ てんちかいびやく じんむてんのう たんじょう
上巻(かみつまき).....「日本神話」(天地開闢からイワレヒコ(神武天皇)の誕生まで)

ちゅうかん じんむとうせい おうじんてんのう
中巻(なかつまき).....神武東征から応神天皇まで

げかん にんとくてんのう すいこてんのう
下巻(しもつまき).....仁徳天皇から推古天皇まで

じょぶん ぎしよせつ もとおりのりなが
序文、偽書説、本居宣長



4. 『日本書紀』の概要

げんそん にっぽんさいこ せいし
現存する日本最古の正史

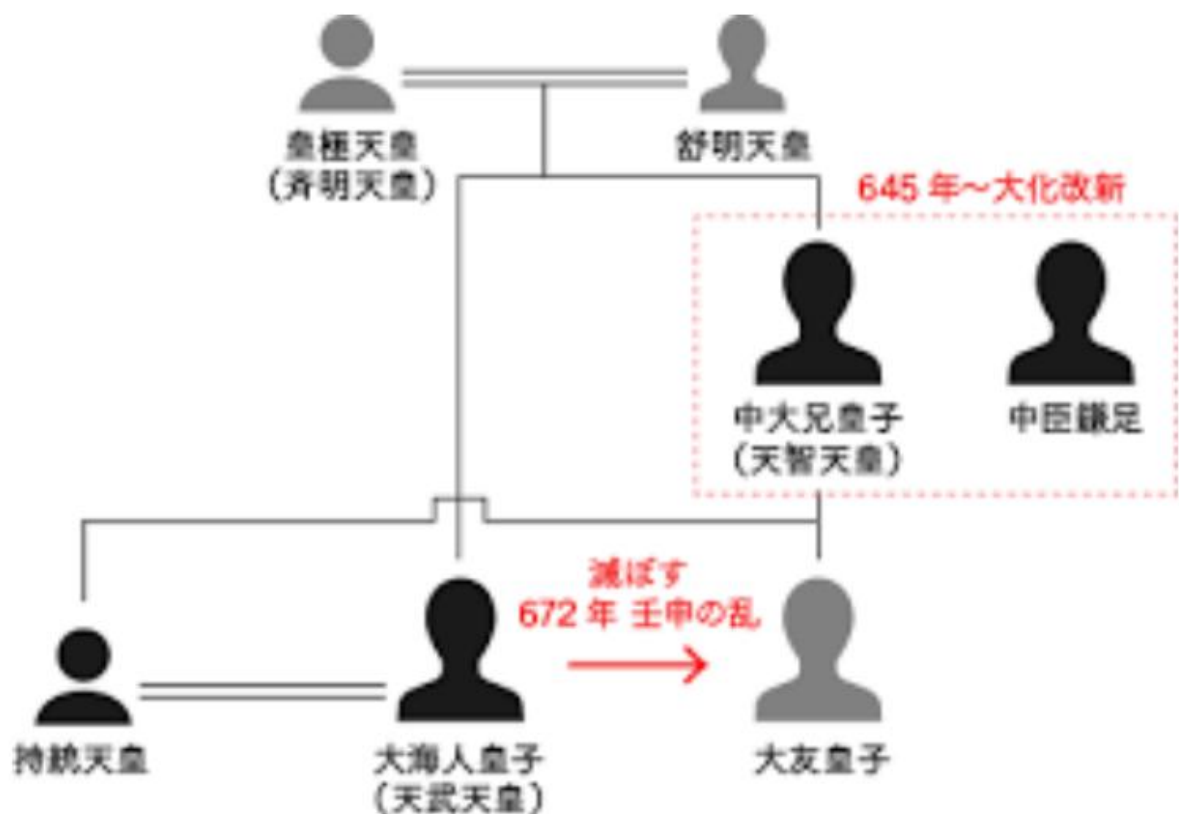
ねん てんむてんのう かわしまのおうじ い か にんに た い し て へんさん めいずる
681年に天武天皇が川島皇子以下12人に対して編纂を命ずる

てんむてんのう みずから せいとうせい せいとうせい しめすひつよう
天武天皇は自らの正当性・正統性を示す必要があった

← 「壬申の乱」(672年)という王権篡奪(クーデター)を経て天皇になった 620年(推古朝)に
『天皇記』『国記』を編纂 → 大化の改新(645年)で焼失 舒明天皇(在位629-641)の時代
に天皇家と蘇我氏の対立

てんむてんのう じょめいてんのう こ
天武天皇は舒明天皇の子

こだいりつりょうこっか ささえるりょうりん ほう さくてい ねんたいほうりつりょう ししよ へんさん
古代律令国家を支える両輪.....①法の策定(701年大宝律令)、②史書の編纂





^{ねん} ^{かんせい} 720年に完成 ^{やく} ^{ねん} 約40年かかる

^{へんさん} 編纂のリーダーは^{とねりしんのう} 舎人親王(^{てんむてんのうだいさんおうじ} 天武天皇第三皇子)であったが、^{じっさい} 実際の^{せきにんしゃ} 責任者は ^{ふじわらのふひと} 藤原不比等

^{ていき} 帝紀、^{きゅうじがい} 旧辞以外に、^{しよし} 諸氏の^{きろく} 記録、^{くだらみふみ} 百済三書(^{くだらき} 『百済記』・^{くたらしんせん} 『百済新撰』・^{くたらほんき} 『百済本記』)、^{かんせき} 漢籍、^{じいんえんぎ} 寺院縁起など^{おおく} 多くの^{ぶんけん} 文献を^{さんしょう} 参照

^{ぜん} 全30巻、^{かん} 系図1巻(^{かん} 系図は^{げんそん} 現存しない)

^{ほんぶんいがい} 本文以外に^{おおく} 多くの^{いつて} 異伝(^{いっしょ} 「一書に曰く」^{いわく})を^{ふくむ} 含む

^{かみよじょう} 神代上 (巻第1).....^{てんちかいびやく} 天地開闢からスサノオまで

^{かみよ} 神代下(巻第2).....^{あしはらのなかつくに} 葦原中国の^{へいてい} 平定、^{てんそんこうりん} 天孫降臨から^{じんむてんのうたんじょう} 神武天皇誕生まで

^{こじき} 古事記(推古まで)より^{ながくじとうてんのう} 長く^{れきし} 持統天皇までの歴史

じゅめい こうぎよく こうとく ただあきら てんじ てんむ じとう ふくむ
(舒明、皇極、考徳、齊明、天智、天武、持統を含む)

りっこくし せいし にほんしよき しよくにほんぎ にほんこうき ぞく
六国史(りっこくし、6つの正史).....「日本書紀」、「続日本紀」、「日本後紀」、「続
にほんこうき にほんもんとくてんのうじつろく にほんさんだいじつろく きよかず ようぜい みつたか
日本後紀」、「日本文徳天皇実録」、「日本三代実録(清和・陽成・光孝)」

こじき にほんしよき そうい
5.『古事記』と『日本書紀』の相違

	こじき 古事記	にほんしよき 日本書紀		
----- --	----- -----	----- -----	---	---
へんさん 編纂 めいれいしゃ 命令者	てんむてんのう 天武天皇	てんむてんのう 天武天皇		
へんさんしゃ 編纂者	ひえだのあれ かたりつたえ おおのやすまる 稗田阿礼が語り伝え、太安万侶が そうじょう まとめ奏上	かわしまのおうじ ちゃくしゅ とねりしんのう そうじょう 川島皇子らが着手、舎人親王が奏上		
せいりつ 成立	ねん 712年	ねん 720年		
かんすう 巻数	ぜん かん 全3巻	ぜん かん 全30巻		
ひょうき 表記	にほん ごじゅうし へんたいかんぶん 日本語重視の変体漢文	かんぶん 漢文		
しゅうろく 収録 ねんだい 年代	てんちかいびゃく すいこてんのう 天地開闢から推古天皇	てんちかいびゃく じとうてんのう 天地開闢か持統天皇		
もくてき 目的	てんのうけ せいとうせい こくない こじ 天皇家の正当性を国内で誇示するため	かいがい ちゅうごくおうちょうにたいしてじこく 海外、とくに中国王朝に対して自国 せいし つたえる の正史を伝えるため		
てんきょ 典拠 しりょう 資料	てんのうけ けいふ じせき かみがみ えいゆう 天皇家の系譜や事績、神々や英雄の ものがたり えがか ていき 物語が描かれていたという「帝紀」 きゅうじ 「旧辞」	ていき きゅうじ ほか ちゅうごく ちょうせん 「帝紀」「旧辞」の他、中国・朝鮮 ししよ しょし ちほう でんしょう せいふ きろく 史書、諸誌や地方の伝承、政府の記録 など		
ないよう 内容	てんのうけ れきし 天皇家の歴史	りつりょうこっか せいし 律令国家の正史		
とく 特徴	しんわじだい じゅうてん おき てんのうけ 神話時代に重点を置きながら、天皇家 れきし かたる にほんごじゅうし ぶんたい の歴史を語る。日本語重視の文体。	はつ せいし いって ちゅうぎ 初の正史。異伝についての注記あり。		

『古事記』と『日本書紀』は、内容、形式、文体において違いが見られる。『古事記』は和風の漢文で書かれ物語性が強い。また、「神代」が全体の3分の1を占め、『日本書紀』(181神)に比べ登場する神の数が多い(267神)。また、出雲神話が『古事記』上巻の3分の1を占めるが、『日本書紀』では出雲神話の扱いは小さく省かれている部分も多くある(稲葉の白兔、タケミナカタ、

サルタヒコ、イザナミの死)。

	古事記	日本書紀		
---	-----	-----	----	--
		正伝	一書	
1	イザナキとイザナミ	△	○	
2	アマテラスとスサノオ	○	○	
3	出雲に降りたスサノオ	△	△	
4	オオムナジ(白兔、八十神)	×	×	
5	オオクニヌシの国作り	×	△	
6	制圧されるオオクニヌシ	△	△	
7	天孫降臨、日向三代	△	○	

古事記に出てくる神話	日本書紀での 有無		舞台			
----- -----	----- -----	----- -----	----	----	--	--
スサノヲとオホナムチ	正伝	異伝				
	(本文)	(一書)				
五穀の起源	\$\times\$	\$\blacktriangleright\$ e\$				

スサノヲのヲロチ退治 ^{たいじ}	\$\bullet\$	\$\bullet\$				
スサノヲとクシナダヒメの結婚 ^{けっこん}		\$\blacktriangleright\$ e\$	いずる 出			
スサノヲの神統譜 ^{しんとうふ}	×	\$\blacktriangleright\$ e\$	おも 重			
稲羽のシロウサギ ^{いねわ}	\$\times\$	×	かみ 神			
八十の神によるオホナムチの試練 ^{はちじゅうかみしれん}	\$\times\$	\$\times\$	はなし 話			
オホナムチの根の堅州の国訪問 ^{ねけんしゅうくにほうもん}	×	×				
オホナムチの葦原の中つ国の統一 ^{あしはらのなかつくにとういつ}	\$\times\$	×				
	せいでん 正伝	いつて 異伝		いずる 出		
ヤチホコの女たち ^{おんな}	ほんぶん (本文)	いっしょ (一書)		ゆき 雪		
ヤチホコのヌナカワヒメ求婚 ^{きゅうこん}	×	×				
スセリビメの嫉妬と大円団 ^{しっとだいえんだん}	\$\times\$	\$\times\$	いずる 出	あし 葦		
オホクニヌシの神統譜 ^{しんとうふ}	\$\times\$	\$\times\$	おも 重	はら 原		
オホクニヌシとスクナビコナ	\$\times\$	\$\bullet\$	かみ 神	の		
依り来る神・御諸山に坐す神 ^{よりくるかみごしょざんざすかみ}	×	\$\bullet\$	はなし 話	なか 中		
オホトシの神統譜 ^{しんとうふ}	×	\$\times\$		つ		
くにゆずり 国譲りするオホクニヌシ	せいでん 正伝	いつて 異伝		くに 国		
	ほんぶん (本文)	いっしょ (一書)				
アマテラスの地上征服宣言 ^{ちじょうせいふくせんげん}	\$\blacktriangleright\$ e\$	\$\blacktriangleright\$ e\$				
アメノホヒの失敗 ^{しっぱい}	●	\$\times\$	くに 国			
アメノワカヒコの失敗 ^{しっぱい}	♠	\$\bullet\$	ゆずる 譲			
アヂシキタカヒコネの怒り ^{いかり}			IJ			
タケミカヅチの遠征 ^{えんせい}	\$\bullet\$	\$\blacktriangleright\$ e\$	かみ 神			

コトシロヌシの服従 ふくじゅう	A	$\$ \blacktriangleleft$ e\$	はなし 話			
タケミナカタの州羽(諏訪)への逃走 しゅうわ すわ どうそう	$\$ \times \$$	x				
オホクニヌシの服属と誓い ふくぞく ちかい						
●=古事記とほぼ一致 ▲=内容に違い こじき いっち ないよう ちがい はあるが対応 x=対応する神話がない たいおう たいおう しんわ						

「日本書紀の神話記述は、出雲神話を排除したほうが律令国家の歴史を語るにはふさわしいという、きわめて政治的な作為がはたらいた結果である。」(三浦佑之『古事記の神々』(2020)) 6.日本神話の内容(戸田民夫『日本神話』(2003)による、原典は『古事記』)

かみがみ にっぽんこくど たんじょう [1] 神々と日本国土の誕生

・混沌とした宇宙→陽と陰が分かれ天と地を形成(天地開闢)

- ・アメノミナカヌシ、タカミムスビ、カミムスビの誕生(造化三神)
- ・ウマシアシカビヒコジ、アメノトコタチの出現(別天神5神[ことあまつかみ])・クニノトコタチ、トヨクモノ、ウヒチニ、ツノグヒ、オオトノジ、オモダルの出現

あめのみなかぬしのかみ だかおさん すひかみ ぞうかみ かみたかまがはら タカミムスビ天之御中主神11高御産巢日神造化三神高天原222カミムスビ神産巢日神 べつてんじん うまこころざしおもね ひこ しんどくしん 別天神333ウマシアシカビヒコヂ宇摩志 阿斯訶備比古遲神独神444アメノトコタ てん の つねたつがみ チ5天之常立神55	ぞうかさんじん 造化三神
	べつあまつかみ 別天津神
くにゆきつねたつがみ 国之常立神66クニノトコタチ	
ゆたかうんのかみ 豊雲野神772	
いもうと ひさとし しんてん ひじ しん トヨクモノ 妹 須比智邇神天38宇比地邇神	
かみよななよいもうと かつくいしん かくくいしん ウヒチニスヒチニ神世七代 妹 活杵神29角杵神4	かみよななよ 神世七代

あめのみなかぬしのかみ だかおさん す ひかみ ぞう かみ かみ たかまがはら かみむすびのかみ タカミムスビ天之御中主神11高御産巢日神造化三神高天原222カミムスビ神産巢日神 べつてんじん う ま こころざしおもね ひ こ しん どん しん 別天神333ウマシアシカビヒコチ宇摩 志 阿 斯訶備比古遲神独神444アメノトコタ てん の つね た つ が み チ5天之常立神55	そう か さん じん 造化三神
そう か み い も う と だ い と い と み と の う じ し ん ツノグヒイクグヒ双神3 妹 大斗乃辨510意富斗能地神	
い も う と お も ね よ る じ ょ う し こ だ ろ こ う の は は り ゅ う し ん オホトノジ 妹 阿 夜 上 訶志古泥神於母陀 流 神6114	オホトノ ベ
い も う と い よ こ し ま び し ん い ざ な ぎ し ん オモダル アヤカシコネ 妹 伊 邪 那美神7512伊邪那岐神	

かみよななよ さいご あらわれ

・ 神代七代の最後に現われたのがイザナギ

おがみ めがみ

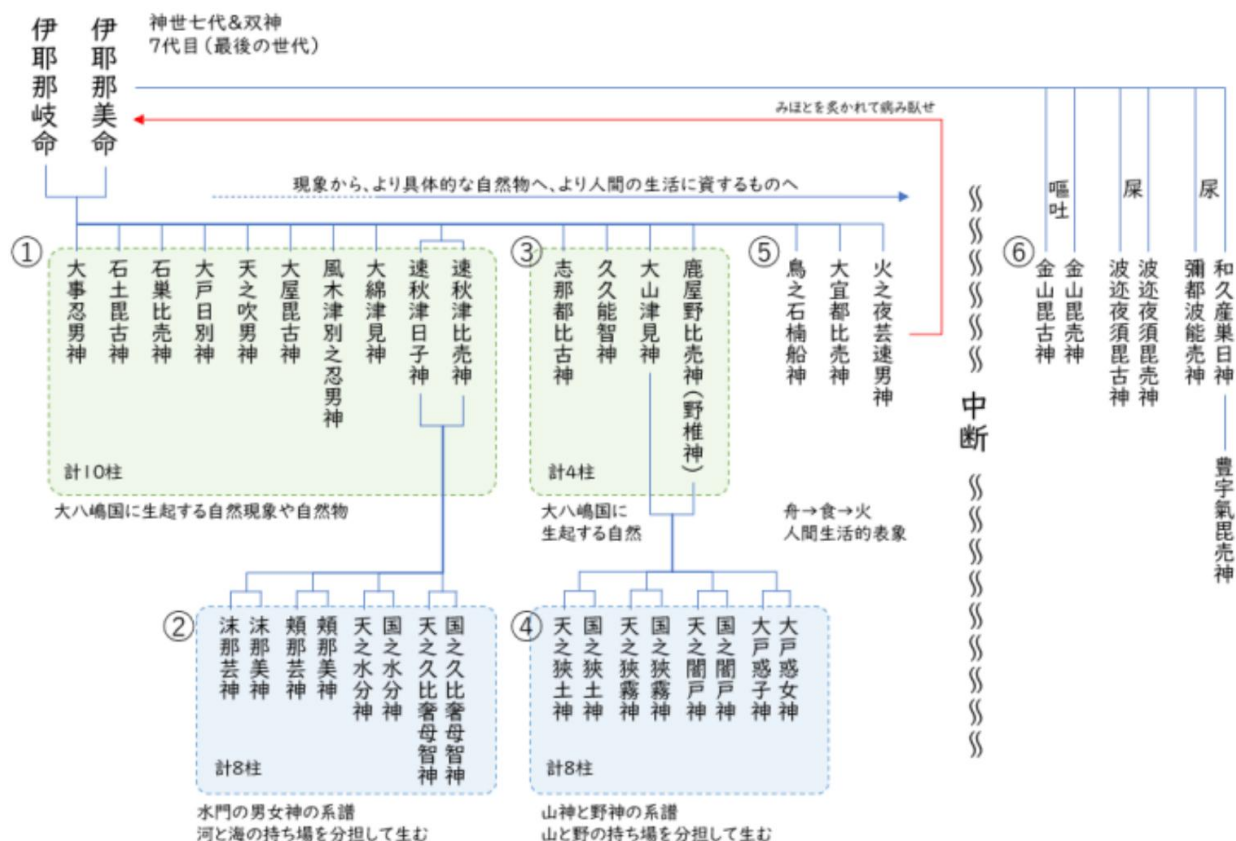
(男神)とイザナミ(女神) → イザナギ、イザ

く に う み か み う み お こ な う と う か み お の

ナミが国生み、神生みを行う(14島35神) オノ

ご ろ じ ま あ わ じ し ま だ い や じ ま ひ と し ふ ぐ こ

ゴロ島、淡路島、大八島 等、ヒルコ(不具の子)



こしき 古事記		にほんしよき 日本書紀						
		ほんぶん 本文	いっしょだいいち 一書第一	いっしょ 一書 だいろく 第六	いっしょだいな 一書第七	いっしょ 一書 だいはち 第八	いっしょ 一書 だいく 第九	つうせつ 通説
こしき 古事記 だい 0大nE	あわみちゆきみのる 淡道之 穂 の せまべつしま 之狭別嶋 あわじの ほのさ わけの しま あわ じしま	あわじしゅう 淡路 洲	あわじしゅう 淡路 洲	あわじ 淡路 しゅう 洲、 あわしま 淡洲	あわじしゅう 淡路 洲	あわじ 淡路 しゅう 洲	あわじ 淡路 しゅう 洲	あわじしま 淡路島
	いよの 伊豫之 にいなしま 二名嶋 いよの ふたなし ま	いよにいな 伊豫二名 しま 洲いよの ふたなし ま	いよにいな 伊豫二名 しゅう 洲	いよ 伊豫 しま 洲 いよ の しま	いよにいなしゅう 伊豫二名 洲	いよ 伊豫 にいな 二名 しゅう 洲	いよ 伊豫 にいな 二名 しゅう 洲	しこく 四国
	の 歴伎之 みつごしま 三子嶋 おきの みつこの しま	おきしゅう 億岐 洲 おきの しま	おきさんし 億岐三子 さかのぼ 溯 おきの みつこの しま	おき 億岐 しゅう 洲	おきしゅう 億岐 洲	おき 億岐 しゅう 洲	おき 億岐 さんし 三子 しゅう 洲	おきとう 隠岐島
	つくししま 筑紫嶋 つくし しま	つくししゅう 筑紫 洲 つくしの しま	つくししゅう 筑紫 洲	つくし 筑紫 しゅう 洲	つくししゅう 筑紫 洲	つくし 筑紫 しゅう 洲	つくし 筑紫 しゅう 洲	きゅうしゅう 九州
	いきしま 伊岐嶋 いきの しま				いきしゅう 壹岐 州いき のしま			いきしま 壹岐島

こじき 古事記		にほんしょき 日本書紀						
	つしま 津嶋つ しま				つしましゅう 對馬 洲 つ しま			つしま 對馬
	さどしま 佐度嶋さ どのしま	さどしゅう 佐度 洲 さ どのしま	さどさかのぼ 佐度 溯	さど 佐度 しゅう 洲	さどしゅう 佐度 洲	さど 佐度 しゅう 洲	さど 佐度 しゅう 洲	さどがしま 佐渡島
	おおやまと 大 倭豊 あきつしま 秋津嶋お おやまと とよあ きつしま	おお やまとと よるをつ しま			おおやまと 大日本豊 あきつしま 秋津洲 おおやまと 大日本豊 あきつしま 秋津洲 おおやまと 大日本豊 あきつしま 秋津洲 おおやまと 大日本豊 あきつしま 秋津洲 おおやまと 大日本豊 あきつしま 秋津洲		おおやまと 大日本 豊 あきつしま 秋津洲	ほんしゅう 本 州
こじき 古事記 ろくとばり 0六 帷	きびみしま 吉備見嶋 きびのこ じま	きびこ 吉備子 さかのぼ 溯 きび このしま	きびこ 吉備子 しゅう 洲	こしゅう 子 州 こし ま		きび 吉備 こ 子 さかのぼ 溯	きびこ 吉備子 さかのぼ 溯	こじまはんと 児島半島
	しょうずしま 小豆嶋 あずきじ ま							しょうどしま 小豆島
	おおだて 大館 おおしま							やしるじま 屋代島 すおう (周防 おおしま 大島)
	おんなしま 女 嶋ひめ じま							ひめしま 姫島 おおいたけん (大分県)
	ちことばしま 知 詞 嶋 ちかの しま							ごとうれっとう 五島列島

こ じ き 古事記		にほんしょき 日本書紀						
	こ じ ま 兩兒嶋 ふたこの しま							だんじょぐんとう 男女群島 ごとうれっとう (五島列島)
	こ じ き 古事記の だいやしま 大八嶋に しゅう ない州	えつしゅう 越 洲 こし のしま	えつしゅう 越 洲	えつしゅう 越 洲		えつしゅう 越 洲		
		おおす 大洲おお のしま		おおす 大洲			おおす 大洲	
						と 磯取 とう 産島 おの ごろ しま	あわしま 淡洲 あわの しま	

おおはちしゅうき さいひ かくひょう
大八 州 記載比較 表

こ じ き だいやしま がいとう しゅう
○ は古事記の大八嶋に該当する 州

イザナキとイザナミが
生んだ神々（古事記より）

イザナキ

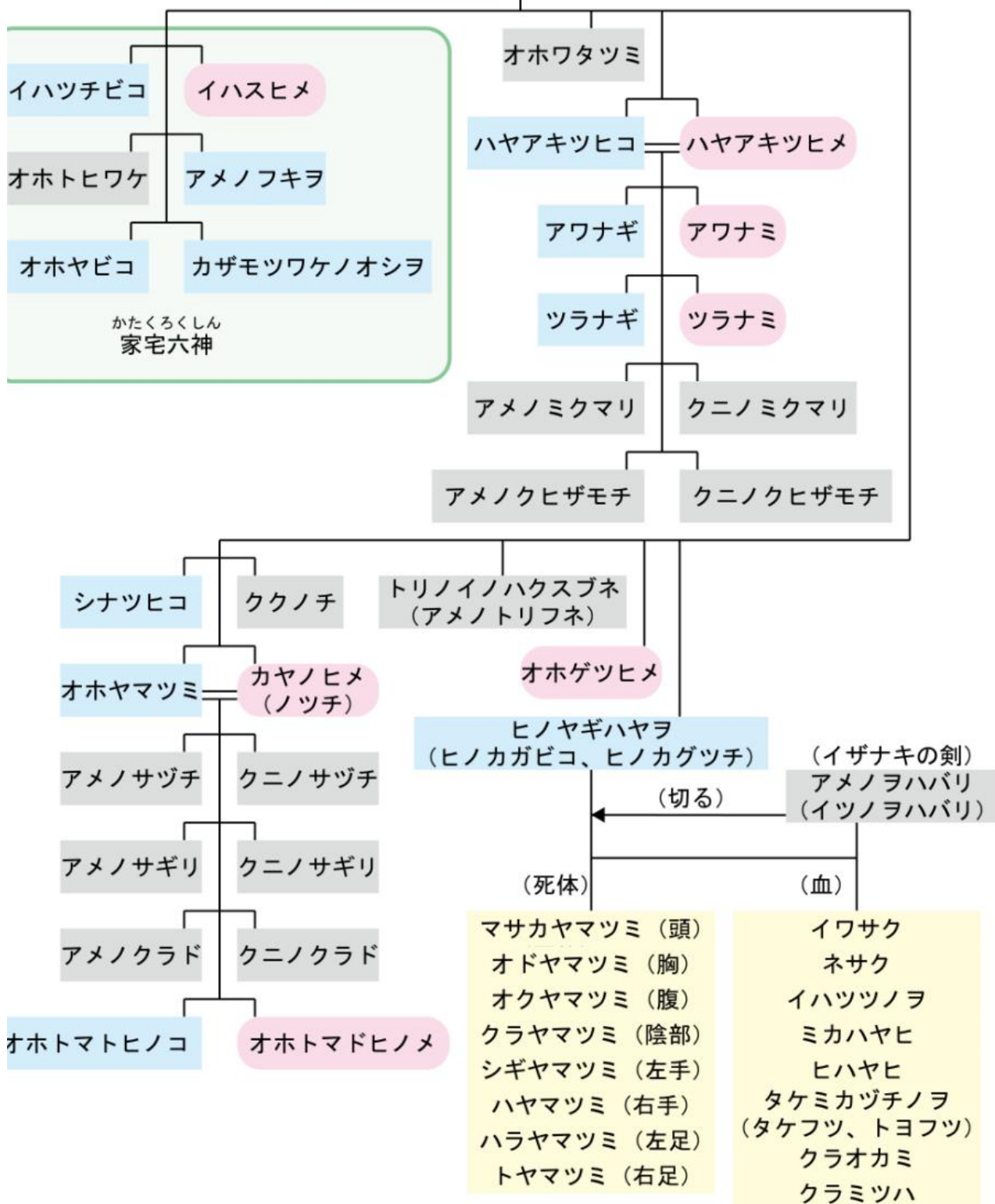
イザナミ

オホコトオシヲ

凡例

男神

女神

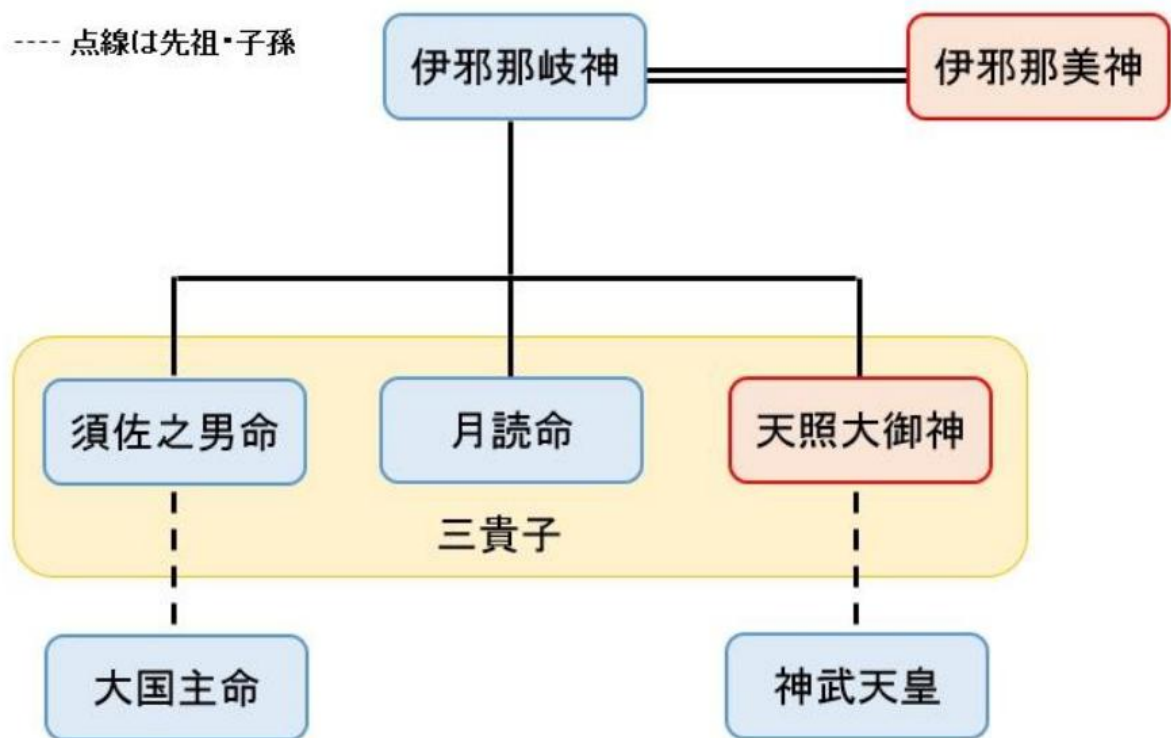


たいようしん とうじょう
[2] 太陽神アマテラスの登場

- ・・イザナギは九^{きゅうしゅう}州^{ひなた}の日向(ひむか)で楔^{みそぎ}(穢れを落とす)
- ・・イザナギの持ち物、衣類^{もちもの}から神々^{いるい}が生まれる
- ・・ワタツミ三神(安曇^{みかみ}の連^{あずみ}の祖^{れん})、ツツノオ三神(住吉^{さんじん}大社^{すみよしだいしゃ})
- ・・アマテラス(左目^{ひだりめ})、ツクヨミ(右目^{みぎめ})、スサノオ(鼻^{はな})が生まれる 三貴神^{みきしん}[みはしらのうずのみこと]

アマテラス.....高天原^{たかまがはら}の統治^{とうち}(日の神^{かみ}、太陽神^{たいようしん}) ツクヨミ.....夜^{よる}の世界^{せかい}の統治^{とうち}(月の神^{つきかみ})

スサノオ.....海原^{うなばら}の統治^{とうち}



- ・・スサノオの反抗^{はんこう} → 高天原^{たかまがはら}からの追放^{ついほう}
- ・・スサノオとアマテラスの争い^{あらそい}と誓約^{せいやく}(うけい)
- ・・アマテラス(スサノオとの誓約^{せいやく})が3人の女神(宗像^{にんめがみ}三女神^{むなかたさんめがみ})と5人の男神^{にんおかみ}を生む
- ・・アマテラスの玉^{たま}から生まれた5人の男神^{うまれにんおかみ}の長子^{ちやうし}がアメノオシホミミ
- ・・アメノオシホミミとタカミムスビの娘^{むすめ}の間^まで生まれたのがニニギノミコト(天孫^{てんそん})
- ・・他の男神は各地^{たおかみ}の国^{かくち}造^{くにのみやつこ}の先祖^{せんぞ}となる

-^{とうちけん}統治権の^{せいとうせい}正当性を^{しんわてき}神話的に^{たかめよ}高めようとする^{いと}意図
- ・^{らんぼう}スサノオの^{つづく}乱暴が^{すいでん}続く(水田の^{はかいとう}破壊等)
- → ^{あまのいわと}アマテラスが^{こもり}天の岩戸に^{せかい}籠り、^{あんこく}世界は^{やみ}暗黒の闇となる
- ・^{やおよろずのかみ}八百万の^{そうだん}神々の^{おどる}相談
- ・^{げいのう}アメノウズメ(芸能の^{めがみ}女神)が^{はだか}裸になっ^{おどる}て踊る
- → ^{いわと}アマテラスが^{すこし}岩戸を^{あけ}少し開けたところを^{ほかにつれだし}アメノタジカラオが^{たいよう}外に連れ出し、^{ひかり}太陽の^{もどる}光が^{もどる}戻る
- ・^{たかまがはら}スサノオが^{ついほう}高天原を^{いずも}追放されて^{いく}出雲に行く
- ・^{とちゅう}途中で^あ会った^{ころし}オオゲツヒメを^{したい}殺し、^{さまざま}その^{のうさんぶつ}死体から^{しょうじる}様々な農産物が^{しょうじる}生じる

[3] ^{えいゆうしん}英雄神の^{とうそう}闘争・^{ぼうけん}冒険と^{あい}愛

- ^{いずも}出雲に行^いった^{こいかわ}スサノオは^{じょうりゅう}肥川の^で上^あ流^うで^あクシナダヒメに出^あ会^うう
- ・^{あばれ}ヤマトノオロチが^{はなし}暴^きれて^きいる^{たいじ}話^{けつ}を^{けつ}聞^{けつ}き、^{けつ}退^{けつ}治^{けつ}する^{けつ}こと^{けつ}を^{けつ}決^{けつ}意^{けつ}
- ・^{たたかっ}ヤマタノオロチと^{しょうり}戦^{しょうり}って^{しょうり}勝^{しょうり}利^{しょうり}
- ・^{きりさい}切り裂^おいた^{きょうじん}尾^{けん}から^{くさなぎのつるぎ}強^{はっけん}靱^{はっけん}な^{はっけん}剣^{はっけん}(草薙^{はっけん}の^{はっけん}剣^{はっけん})を^{はっけん}発^{はっけん}見^{はっけん}。





・スサノオの^{だいめ}6代目がオオクニヌシ

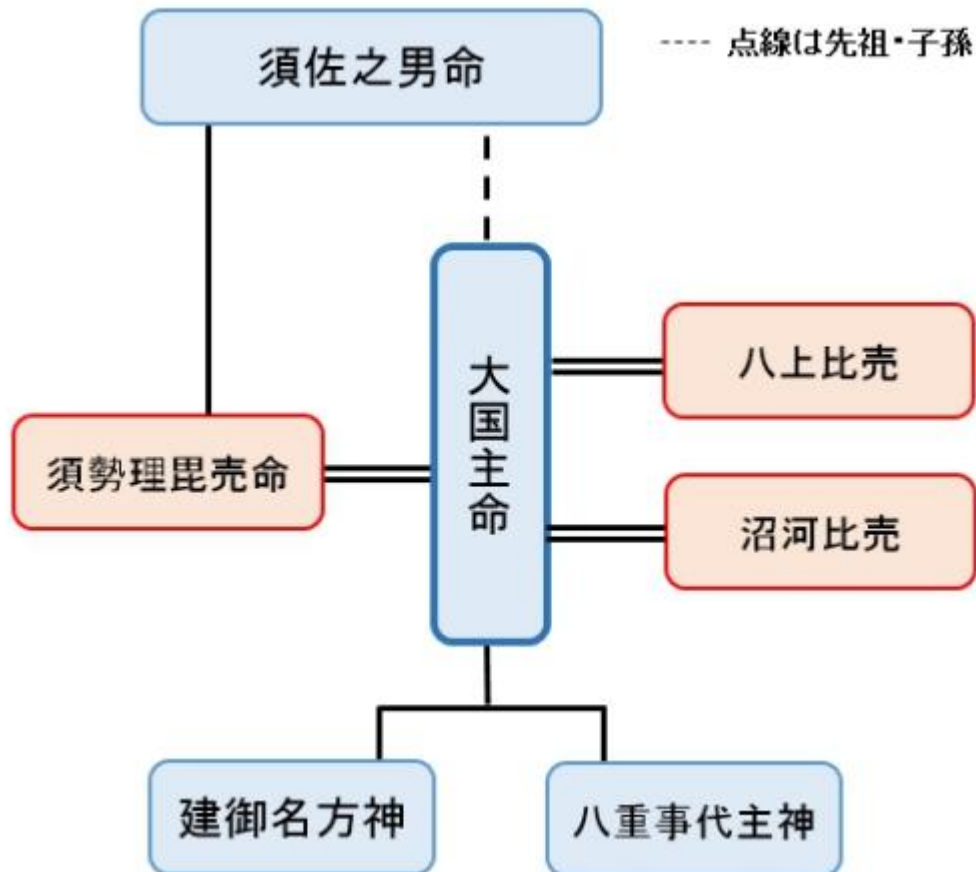
- ・オオムナチ(^ご後のオオクニヌシ)には多数の兄^{たすう}弟^{きょうだい}(八十神)がいたが、オオムナチ(^{ばってい}末弟)を仲間はずれにする

- ・稲羽の白兔の物語^{いねわ はくと ものがたり}・・・オオムナチが皮をはがされた白兔^{かわ しろうさぎ}を助ける^{たすける}

- ・オオムナチがヤガミヒメと結婚^{けっこん} ← 他の兄^た弟^{きょうだい}が迫害^{はくがい}

- ・オオムナチは紀伊国に逃れる^{きいくにのがれる}

- ・その後、根の国に行き、スセリビメ(スサノオの娘)と出会い結婚
- ・数々の試練を乗り越え出雲に戻ってきたオオムナチは地上の国の主 となりオオクニヌシと呼ばれるようになった
- ・オオクニヌシは高志国のヌナカワヒメと結婚
- ・他にも多くの女性との間で181神を生む(「日本書紀」一書)





[4] 葦原の中つ国の主権争い

- ・ アマテラスがアメノオシホミミ(長男)に葦原の統治を命じる
- ・ アメノオシホミミは天の浮橋まで来て中つ国を眺め、その混沌状態(不穩、無秩序)を見て高天原に引き返した
- ・ そこでアマテラスはタカミムスビ(高天原の司令塔)と協議し、二男のアメノホヒを地上に派遣したが、アメノホヒはオオクニヌシに感心し中つ国にとどまった。
- ・ 次いで若いアメノワカヒコ(アメツクミタマの子)を送るが、オオクニヌシの娘シタテルヒメと結婚してしまい、高天原に戻ってこなかった。
- ・ 2回の失敗を踏まえ、オオクニヌシに圧力をかけるためタケミカツチを中つ国に派遣し、国譲りの交渉を行った。
- ・ コトシロヌシ(オオクニヌシの子)は中つ国の統治権を天つ神に献上することをオオクニヌシに進言した。

- ・一方、タケミナカタ(オオクニヌシの子)は国譲りに反対し、タケミカツチと力競べを
するが、タメミナカタに敗北し、信濃国の諏訪まで逃げた。
- ・その結果、オオクニヌシは中つ国の主権を譲渡し引退した。

[5] 地上に降る神々

- ・タケミカツチが高天原に帰った後、アマテラスとタカミムスビは長子アメノオ シホミミ
に改めて中つ国の統治を命じたが、アメノオシホミミは代わりに息子 のニニギ(母はタカ
ミムスビの 娘)を天下りさせることを提言
- ・こうしてアマテラスの孫ニニギが降臨することとなった(天孫降臨)。
- ・その際、アマテラスはニニギに三種の神器(鏡、剣、玉)を授けた。
- ・ニニギは下界へ向かう途中(天の八衢)、サルタヒコに出会い、サルタヒコ が道案内
することになった(サルタヒコの故郷は伊勢)。
- ・また、アメノコヤネ(中臣連の祖)やアメノフトダマ(忌部首の祖)なども同行。
- ・ニニギが降り立ったのは筑紫の日向の高千穂



	やたのかがみ 八咫の鏡(やたのかがみ)	やさかにのまがたま 八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)	くさなぎのつるぎ 草薙の剣(くさなぎのつるぎ)
ほんもの 本物	いせじんぐうないくう 伊勢神宮内宮	こうきょごしょけんじ ま 皇居御所剣璽の間	あつたじんぐう 熱田神宮
かたしろ 形代	こうきょかしこどころ 皇居 賢 所		こうきょごしょ けんじ ま 皇居御所 剣璽の間

[6] 地上の王家誕生

- ちじょう おり うみべ むすめ で あ い けっこん
・ 地上に降りたニニギは海辺でコノハナサクヤヒメ(オオヤマツミの 娘)に出会い結婚
- あね みにくいようし いっしょ
・ しかし、姉のイワナガヒメ(醜い容姿)も一緒にいてきたので、ニニギはイワ ナガヒメを
おい か え し てんのう じゅみょう かぎり げんいん
追い返した。→ 天皇の寿 命 に限りがあることの原因
- いちや ちぎり み ご も り うみさちひこ やまさち
・ コノハナサクヤヒメは一夜の契りで身ごもり、ホデリ(海幸彦)、ホスセリ、ホオ リ(山幸彦)の3人の子を生んだ。



・ホオリ(山幸彦)はホデリ(海幸彦)から釣道具を借りて釣りにでかけたが、釣針を魚にとら取られてしまい、ホデリから強く叱られた。

・オホリは、知恵の神シシオチの助言により船で海に出て、ワタツミ(海の神)の住む宮殿に着く。そこで海の神の娘トヨタメマヒメと結婚。

・タイの喉に刺さった釣針を見つけ、3年ぶりに地上に帰る。

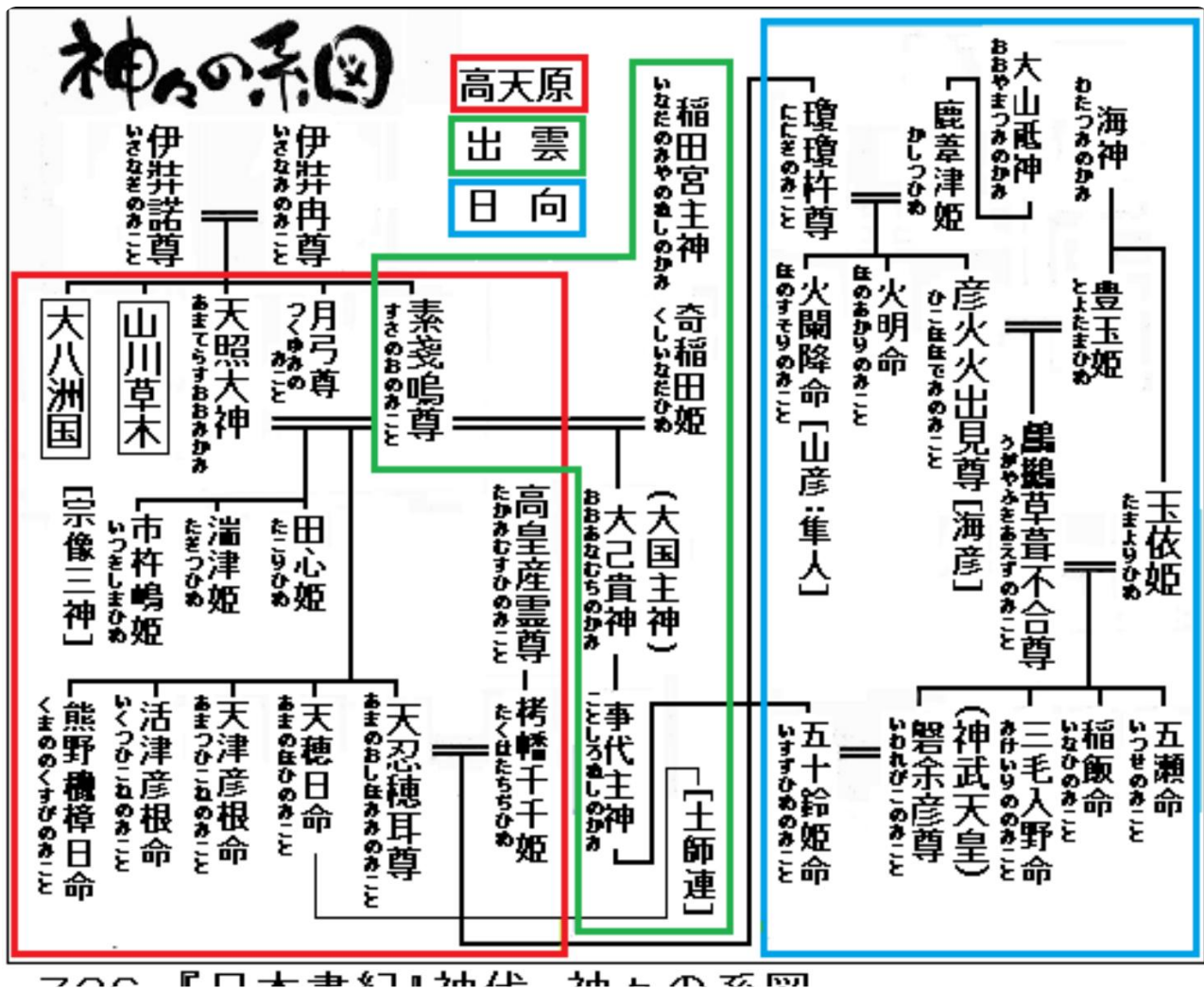
・その後、ホオリ(山幸彦)はホデリ(海幸彦)と対立するが、ホデリが降参してホオリを護衛する役目につく.....ホデリの子孫が隼人

・トヨタマヒメはホオリの子を生むが、その出産の際、ホオリが産屋をのぞき見たため、トヨタマヒメは海宮に帰ってしまった。

・トヨタマヒメが産んだ子がウガヤフキアエズ(神武天皇の父)

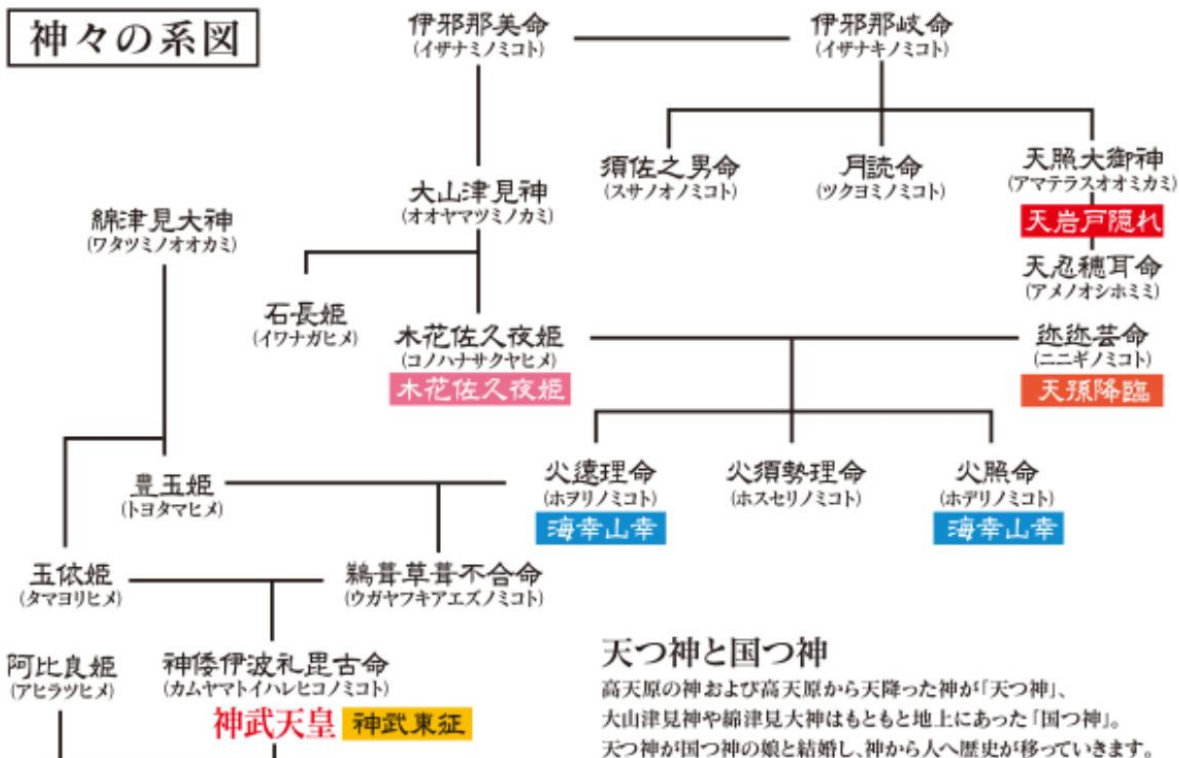
・トヨタマヒメの妹タマヨリヒメが養母としてウガヤフキアエズを育てたが、ウガヤフキアエズはそのタマヨリヒメと結婚し、イツセ、イナヒ、ミケヌ、ワカミケヌの4人の息子を生んだ。

・その末子ワカミヌケ(カムヤマトイワレヒコ)が東征し「神武天皇」になる



ひなたさんだい 7. 「日向三代」について

いずもこくゆる てんそんこうりん たかまがはら あしはらのなかつくに こうりん
[出雲国 議] → [天孫降臨] (高天原から葦原中国に降臨) アメノオシホノミミ(アマ
テラスの子)は降臨せず 1.ニニギノミコト(アマテラスの孫).....日向・高千穂峰に降臨 2.
ホオリ(山幸彦、ヒコホホデミ)...ニニギとコノハナサクヤヒメの子 3.ウガヤフキアエ
ズ.....ホオリとトヨタマヒメの子 日向三代
→ カムヤマトイワレヒコ(神武天皇) [ウガヤフキアエズとタマヨリヒメの子]



天つ神と国つ神

高天原の神および高天原から天降った神が「天つ神」、大山津見神や綿津見大神はもともと地上にあった「国つ神」。天つ神が国つ神の娘と結婚し、神から人へ歴史が移っていきます。

ひなたさんだい りょうぼ [日向三代の陵墓]

きりしまじんぐう さいじん 二二ギ(霧島神宮の祭神) ・ ・ ・ ・ ・ えのさんりょう かごしまけん さつませんだいし 可愛山陵(鹿児島県薩摩川内市) ほおり(鹿児島神宮の祭神) ・ ・ ・ ・ ・ たかやさんじょうりょう かごしまけん きりしまし 高屋山上 陵(鹿児島県霧島市) うどじんぐう ウガヤフキアエズ(鵜戸神宮の祭神) ・ ・ ・ ・ ・ あいらさんじょうりょう かごしまけん かのやし 吾平山上陵(鹿児島県鹿屋市)



えのさんりょう
可愛山陵(えのさんりょう)



たかやさんじょうりょう
高屋山上陵(たかやさんりょう)



あいらさんじょうりょう
吾平山上陵(あいらさんりょう)

もりこういち けんかい にっぽんしんわ こうこがく
[森浩一の見解] (『日本神話の考古学』(1993)より)

- 古代の日向は南九州全体(宮崎県だけではない)
- 吾田(阿多)は薩摩半島(←かつて「吾田半島」と呼ばれていた)
- コノハナサクヤヒメは別名「神吾田津姫(カムアタツヒメ)」
- 薩摩半島は東シナ海沿岸を利用した海上交通の中継地
- 阿多隼人はゴホウラ貝やイモ貝を南島から北部九州に運ぶ役割を果たしていた
- 「神話の展開のうえでは南九州と天皇家の遠い先祖が不離一体の関係にあった」
- 実際の関係があったのか、「完全な創作」か？
- 「「記・紀」の物語のような史実があったとは考えられないが、

「完全な創作」とみるには無視できない考古学的資料がある。」

- 「三陵」は明治政府が1874年(明治7年)に「政治決定」したもの。
- 前方後円墳は日向(西都原古墳群)と大隅半島に集中、薩摩には乏しい ← 川内市で前方後円墳が発見される(1987年)
- 応神天皇の妃に「日向泉長姫」がいる..... 「日向の泉(出水)の長島出身」
- ← 古代天皇家と隼人のつながりを示している

千田稔『王権の海』(1998) (歴史地理学者、元国際日本文化研究センター教授)

- 大和(大和)国は海人族と深いかわりがある
- 韓国岳への八幡神の天降りの伝承(鹿児島神宮)
- 吾田は薩摩国阿多郡の「阿多」に関連する地名
- 海幸彦は隼人にあてて語られている
- 海人たちを率いた宗像氏は隼人と同じ種族
- 基層としての海洋民文化、海人族のネットワーク・オオヤマツミは南九州の海人族の神(宮本常一)



はやとまい
隼人舞





準人族呉人説

久々知 武



はやと たて
隼人の楯

8. 日本神話の起源

さんそうこうぞう <三層構造>

- A 縄文時代以来の固有のもの
- B 航海民が持ち込んだ南方的要素
- C 騎馬民族の文化の系譜を引く北方系の部分

① きばみんぞくてきようそ 騎馬民族的要素

- 檀君神話と高天原
- 天孫降臨(高句麗・百済の建国神話との共通性)
- 三種の神器
- フェルトと真床御衾(まとお ふすま)
- プリヤート神話との類似(火の神の死)

なんぼうてきようそ

② 南方的要素

- 稲羽の白兔 いねわ しろうさぎ
- 竜蛇信仰 たつだしんこう
- 江南の太陽神信仰の影響 こうなん たいようしんしんこう えいきょう
- 三貴子(太陽、月、海) みきこ たいよう つき うみ
- 失われた釣針 うしなわ つりばり
- 水の精との結婚 みずのせい けっこん

ぎりしゃしんわ るいじ

③ ギリシャ神話との類似

- アメノウズメの踊り おどり
- スサノオがヤマトノオロチを退治し妻を得る たいじ つま え る
- オオクニヌシと八十神の対立 やそがみ たいりつ
- 山幸彦と海神の娘の結婚 やまさち わたつみ むすめ けっこん

← ギリシャからスキタイ、高句麗を経て日本に伝わった こうくり へ て にっぽん つたわっ

ギリシア神話と日本神話

比較神話学の試み

吉田 敦彦





にっぽんしんわ けんきゅう し [日本神話の研究史]

- ・新井白石『古史通』(1716).....古代の神々を人として合理的・実証的に探究
高天原を常陸国に比定
- ・本居宣長『古事記伝』(1790-1822)...古事記の詳細な注釈、古事記を高く評価
- ・平田篤胤『古史成文』(1818).....宣長の研究を受け日本神話を独自に解釈
- ・山片蟠桃『夢の代』(1820).....日本神話を批判的に考察
- ・忌部正通『日本書紀口訣』(1367)
- ・吉田兼俱『日本書紀神代抄』(15世紀)
- ・久米邦武「神道八祭天の古俗」(1891) ← 国学者から非難され東京帝大教授を辞任
- ・高山樗牛「古事記神代巻の神話及び歴史」(1899)...神話部門と歴史部門を判定
- ・津田左右吉『神代史の新しい研究』(1913)古事記・日本書紀の史料批判
「記紀神話は天皇家の統治の由来を物語る政治的な創作物」
- ・石川三四郎『古事記神話の新研究』(1921).....世界史的視野から日本神話を研究、月氏族(カチ族)、バビロン、ヒッタイトと日本民族の関係を考察
- ・高木敏雄『日本神話伝説の研究』(1925)比較神話学
- ・松村武雄『神話学原論』(1940)
- ・三品彰英『日鮮神話伝説の研究』(1943)
- ・大林太良『日本神話の構造』(1961)

- 鳥越憲三郎『出雲神話の形成』(1966)、『神々と天皇の間』(1970)
- 直木考次郎『日本神話と古代国家』(1990)[1965-90年に書かれた論文集]
- 上田正昭『日本神話』(1970).....岩波新書
- 上山春平『神々の体系(正・続)』(1972、75)
- 吉田敦彦『ギリシャ神話と日本神話』(1974)
- 『講座 日本の神話(全11巻)』(1976-78)
- 『日本神話研究(全3巻)』(1977)
- 吾郷清彦・鹿島昇編『神道理論大系』(1984)
-神道、日本神話とユダヤ神話、インド神話の関係を考察
- 森浩一『日本神話の考古学』(1993)
- 神野志隆光『古事記と日本書紀-「天皇神話」の歴史』(1999)
- 溝口睦子『アマテラスの誕生』(2009)
- 三浦佑之『古事記の神々』(2020)
- 田中英道『日本神話と同化ユダヤ人』(2020)

つだそうきち 津田左右吉

- 1873年 岐阜県で生まれる(津田家の先祖は尾張藩家臣)
- 1891年 東京専門学校(早稲田大学)を卒業し、中学校教員になる
- 1908年 満鉄調査室研究員
- 1918年 早稲田大学講師、20年より教授
- 1940年 著作が皇室尊厳を冒瀆しているとして起訴(出版法違反)、早大教授辞任
- 1949年 文化勲章受章
- [主著]『神代史の新しい研究』(1913)、『古事記及び日本書紀の新研究』(1919)、
『文学に現われたる我が国民思想の研究(全4巻)』(1917-21)、『神代史の
研究』(1924)

き き ぶんけんがくてきこうしょう おこない き き しんわ じんむてんのう けつ し はちよ じんぐうこうごう
記紀の文献学的考 証を行い、記紀神話から神武天皇、欠史八代から神功皇后ま
しじつ しりょうてき か ち まったく しゅちょう
では史実ではなく、資料的価値は全くないと主張。

こ じ き およびにほんしよき けんきゅう 『古事記及び日本書紀の研究』(1940)

き き きさい ひはん ようする ひはん げんみつ くわえ うえ き き
「記紀の記載は批判を要する。そういう批判を厳密に加えた上でなければ、記紀というも
れきしてきけんきゅう ざいりょう
のは歴史的研究の材料とすることはできない。」

き き かみよし およびじょうだい ものがたり もくてき しゅとしてこうしつ きげんゆらい けんい はってん
「記紀の神代史及び上代の物語の目的は、主として皇室の起源由来とその権威の発展の
じょうせい とく
情勢とを説くところにあった。」

せんご しょうちょうてんのうせい こうしつ ようご けんこく じじょう ばんせいいつけい しそう 戦後は象徴天皇制、皇室を擁護 (『建国の事情と万世一系の思想』(1946))

こくみんてきけつごう ちゅうしん こくみんてきせいしん い き た しょうちょう こうしつ せんざい
「国民的結合の中心であり国民的精神の生きた象 徴であられるところに、皇室の存在
い ぎ
意義がある。」

「「われらの天皇」はわれらが愛さねばならぬ。」



なおき こうじろう [直木考次郎] (1919–2019)

ひょうごけん う ま れ きょうとだいがく し がっ かそつ ねんかいぐん にゅうたい おおさかいちりつだいがく おかやまだいがくきょうじゅ
兵庫県生まれ、京都大学史学科卒。1943~45年海軍に入 隊。大阪市立大学、岡山大学教授。
せんご にっぽん だいひょう こ だ い し けんきゅうしゃ こ だ い こ っ か せいりつ わのくに
戦後の日本を代 表 する古代史研究 者。『古代国家の成立』(1965)、『倭国の
たんじょう
誕生』(1973)

にっぽんしんわ こ だ い こ っ か ねん か い ろんこう
『日本神話と古代国家』(1990).....1965~88年に書いた論考

つ だ そ う き ち き き しんわ けんきゅう ひやくてき
「津田左右吉は「記紀」神話の研究を飛躍的におしすすめた」

てってい しんわひはん にっぽんしんわ こ だ い てんのうせい さんぶつ ろんしょう き きの
「徹底した神話批判」「日本神話が古代天皇制の産物であることを論 証」「「記・紀」の
しんわ こうせい ぞうさく き じ おおい つ だ ていき ただしさ つ だ がくと
神話には後世の造作による記事が多いという津田の提起の正しさ」・「津田学徒」である
わたし
私

き きの ひはん すいしん せきにん
・「記・紀」批判をよりいっそう推進する「責任」





『^き記・^{きの}紀』の目的は「^{もくてき}天皇には^{てんのう}日本を^{にっぽん}支配する^{しはい}正当な理由^{せいとう りゆう}がある」ことを示^{しめす}すこと

→ 『^き記・^{きの}紀』の^{きじ}記事には^{げんみつ ひはん ひつよう}厳密な批判が必要

「^{さんせいきまつ}三世紀末ごろから^{やまとちほう}大和地方の内外に^{ないがい}権力^{けんりよく}を持つ^も豪族^{ごうぞく}があらわれはじめ、^{よんせいきなかがろ}四世紀中ごろ、それらを^{とうごう}統合して^{やまとちやうてい}大和朝廷が^{せいりつ}成立し、^{すじんてんのう}崇神天皇が^{しょだい}初代の^{てんのう}天皇となった。」

「^{てんのうけ}天皇家の本拠地は^{ほんきょち}三輪山の^{みわやま}山麓^{さんろくちいき}地域」

「^{よんせいきまつ}四世紀末から^{ごせいき}五世紀は^{おおきなせいじてきへんどう}じめにかけて、^{おこり}大きな政治的変動^{おおさかへいや}が起こり、^{きやうだい}大阪平野に^{ぜい}強大な勢力^{ちから}を持つ^も豪族^{ごうぞく}が起こって^{おこっ}崇神王朝^{すじんおうちやう}を^{あつとう}圧倒し、これを^{しはいか}支配下におさめるようになった。」

「^{おうじんてんのう}応神天皇は^{いりむこ}入婿によって^{あたらしいおうちやう}新しい王朝^{けいせい}を形成した。」

じんむてんのう でんせつじょう ものがたりう えのじんぶつ じんむてんのう じったい
「神武天皇はまったく伝説上、物語上の人物」「神武天皇の実体はなににもない」

じんむとうせい ものがたり おうじんてんのう やまとへいてい しじつ つくら
「神武東征の物語は、応神天皇の大和平定の史実をもとに作られた」

き きの かみよ ものがたり ひかくてきこうだい てんのう たちば へんしゅう こだい
「『記・紀』の神代の物語は比較的后代に天皇の立場から編集されたもので、古代の
みんしゅう ひろくしんじ しんわ やまがたばんとう あんどうしょうえき してき
民衆に広く信じられた神話ではない」.....山片蟠桃、安藤昌益が指摘していたこと

てんのうちゅうしん き き しんわ だいにっぽんていこくけんぽう かくりつ めいじてんのうせい せいしんてきしちゅう
「天皇中心の『記紀神話』は大日本帝国憲法で確立した明治天皇制の精神的支柱」

てんのうりょう ぎぞう おおい
「『天皇陵』も偽造されたものが多い」

うえだまさあき [上田正昭] (1927–2016)

ひょうごけん う ま れ きょうとだいがく し がっかそつ きょうとだいがくきょうじゅ おおさかじょしだいがくがくちょう にっぽんこだいこっか
兵庫県生まれ、京都大学史学科卒。京都大学教授、大阪女子大学学長。『日本古代国家
せいりつ し けんぎゅう き か じん にっぽんしんわ
成立史の研究』(1959)、『帰化人』(1965)、『日本神話』(1970)

にっぽんしんわ かんがえる 『日本神話を考える』(1991)

しんわ か か しんわ か か かくさ しんわ
神話=「書かれた神話」+「書かれざる隠された神話」

き き しんわ にっぽんしんわ ば かたり かたりべ
「『記紀』神話が日本神話のすべてではない、ハレの場における語り、語部

ひかみ
アマテラス=オオヒルメムチ=日神

とらいしぞく あましゅうだん かんけい ふかい
ツキヨミ.....渡来氏族、海人集団と関係が深い

さんはしら わたつみしん すみよしおおがみ すみよしじんじゃ すみよしたいしゃ
三柱のワタツミノカミ(綿津見神).....住吉大神(住吉神社、住吉大社)

こうそしん にげんせい あまてらすおおみかみ こうおさんひかみ
皇祖神の二元性.....天照大神、高御産日神(タカミムスビノカミ)

にっぽんみんぞく ふくごうみんぞく か た さだきち せんじゅうどちゃくみん やよいけいみんぞく てんそんみんぞく
日本民族は「複合民族」(嘉田貞吉)...先住土着民+弥生系民族+天孫民族

アマテラス神話(先住の米作農耕民族)とタカミムスビ神話(遊牧民文化をもつ侵入民族)
は全く別系統の神話圏に属するもの(岡正男)

対馬にタカミムスビの古社が存在する←朝鮮半島からツングース系の民族が到来

アマテラス.....「アマ」は「天」ではなく「海」である(=新井白石の解釈)

アマテラス大神の海神的要素、在地(伊勢)の海人集団の太陽信仰

「天照大神の神話には道教の最高の仙女ともいうべき西王母の信仰が重層していた」

うえやましゅんぺい [上山春平](1921-2012)

和歌山県生まれ、京都大学哲学科卒。1943-45年海軍で回天特攻隊配属、京都大学教授。

『弁証法の系譜』(1963)、『大東亜戦争の遺産』(1969)、『埋もれた巨象』(1977)

かみがみ たいけい 『神々の体系』(1972)

戦時中に「古事記」を読む(潜水艦の中)

津田左右吉の主張に共感.....「神代史は皇室の権威の由来を説くために作られたもの」
→ この説の当否を自分の眼で確かめる.....記紀神統譜の研究 本居宣長の主張(「国学」、
日本文化の土着思想)は受け入れられない ← 中国思想からの影響.....「淮南子」「老子」

日本の古代国家形成過程における「東アジア的背景」.....外来文化の吸収



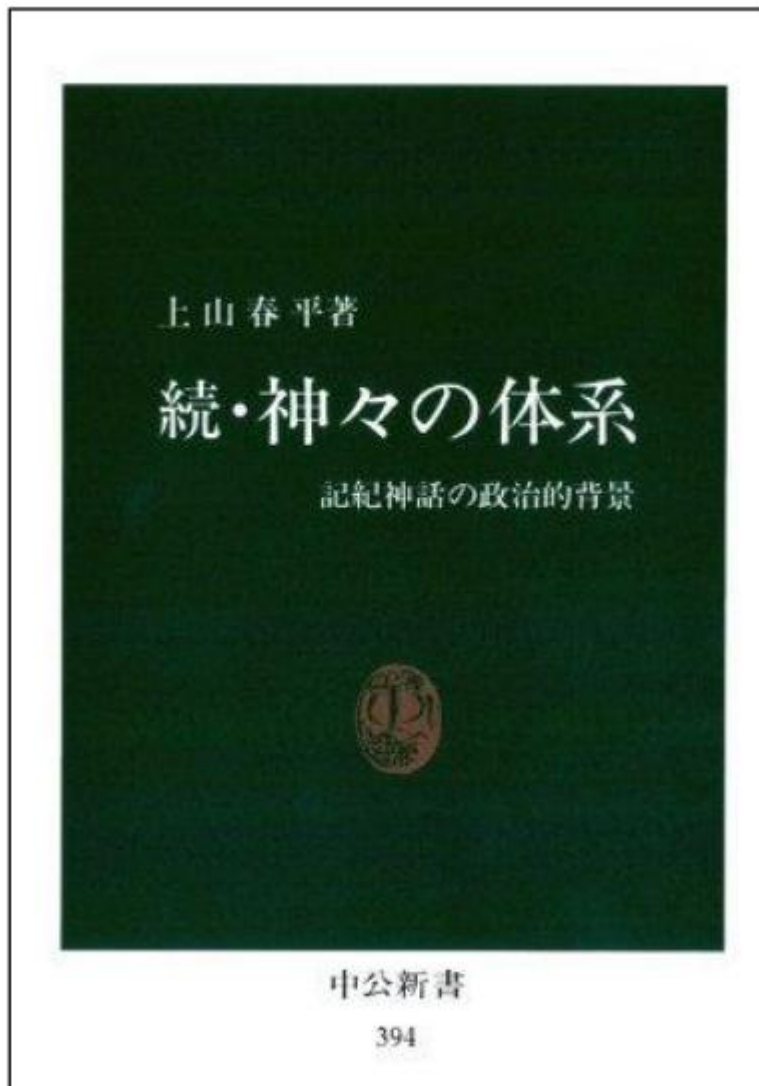
上山春平著

神々の体系



中公新書

291



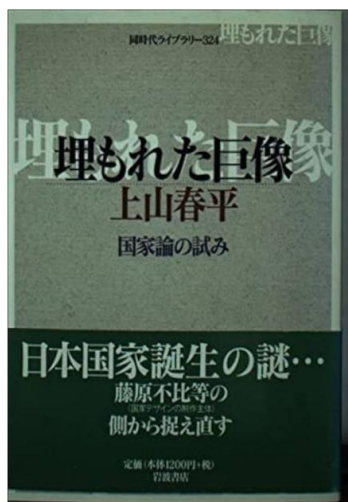
ふじわらのふひと ちゅうしんとする は た し やくわり ふじわら し どくさいたいせい
藤原不比等を中心とするグループが果たした役割……「藤原氏独裁体制」

き き れきし てんのうけ ふじわら し み る べ き
「記紀」の歴史は「天皇家のためというよりはむしろ藤原氏のため」と見るべき。

もとあき かめん ふ ひ と じっけん
「元明の仮面にかくれた不比等の実権」

てんのうけ けんりよく ご せい きの やまと ご う じだい ちょうてん たっし い ご じゃくたいか か ほど
「天皇家の権力は五世紀の「倭の五王」時代に頂点に達し、以後しだいに弱体化の過程
をたどり、大化の改新によって再び強大化されたように見えるが、それは外見だけのこと
であり、実際には、理念的に高められた天皇家の権威が新興の藤原家の実権 掌握の手段
として利用されたに過ぎなかった。」

ふじわら し ぜんしん なかおみ し たいかかいしんい ぜん す く な く と も てんのう だいこう こくせい
「藤原氏の前身たる中臣氏は、大化改新以前において、少なくとも天皇の代行として 国政
ちゅうすう さん よ いえがら
の中 枢 に参与できるような家柄ではなかった。」



おおばやし たりょう 大林 太良

とうきょうと う ま れ とうきょうだいがくけいざいがくぶそつ だいがく みんぞくがく まなぶ とうきょうだいがくきょうじゅ
東京都生まれ、東京大学経済学部卒、ウィーン大学で民族学を学ぶ。東京大学教授。

にっぽん しんわ きげん いなさく しんわ やまたいこく
『日本 神話の起源』(1961)、『稲作の神話』(1973)、『邪馬台国』(1977)

しんわ けいふ ねん か ろんこう
『神話の系譜』(1991).....1971~86年に書かれた論考

しんわ したい かくぶい かみがみ うまれる したいかせい
イザナギ神話(死体の各部位から神々が生まれる[死体化生])

ちゅうごく かなん ばんこしんわ ゆらい せかいかくち どうよう しんわ
.....中 国(華南)の盤古神話に由来、世界各地に同様の神話がある

いじょうしゅっさん ちゅうごく
異常出産 → ミソギ、ウケイ.....中国、ヒッタイトにある

うみさち やまさち こうなん しんわ
海幸・山幸.....インドネシア、ミクロネシア、江南の神話

てんいわけしんわ こうくり しんわ
天岩屋神話.....高句麗の神話

てんそんしんわ しらぎ しんわ
天孫神話.....新羅、モンゴルの神話

う け ひ し ん わ に っ ぽ ん し ん わ い ん お う し ん わ て き よ う そ き た ほ く ち く み ん ぶ ん か
宇気比神話.....日本神話における印欧神話的要素、北イラン牧畜民がギリシャ文化の

え い き ょ う う け ほ く ち く み ん ぶ ん か は い り し は い し ゃ ぶ ん か い ち ぶ に ち ほ ん に
影響を受けてのち、アルタイ牧畜民文化に入り、それが支配者文化の一部として日本に
は い っ
入った

し た い か せ い さ い ば い し ゃ く ぶ つ き げ ん し ん わ ぶ ん ぶ き り し
死体化生の栽培植物起源神話(オオゲツヒメ).....インドネシア、メラネシアに分布 ギリシ
や し ん わ か ん け い
ヤ神話との関係

